哲學研究　第六十四號

ハウプトマンの神秘主義

成瀬無極

一

ハウプトマンには昔から神秘的傾向とも云ふべきものが認められた。自然主義に安住し得ないで象徴主義乃至新浪漫主義に赴いたのも其爲である。最近に於て、かの「使徒(アポステル)」に胚胎し「基督狂(ナル・イン・クリスト)」に著く現はれた宗教的、狂熱的傾向が更に濃厚な神秘的色彩を添へて來たやうである。元來「惑溺的(シュヴェルメリッシュ)」の傾向は彼の「人物(フィグーレン)」の特色の一つとなつてゐた。徹底自然主義の代表作と云はれる「踏切番(バーンヴェルテル)ティール」を取つて見ても、主人公ティールは一面極めて野生的人物であると同時に他面に於て深く敬虔なところを持つてゐる。「自然」の前に跪拜する「原人」の俤を彼は示してゐる。露西亞人の描く「馬鹿」のタイプである。「基督狂」がドストイェウスキイの「白痴(イディオット)」と比較せられるのも偶然では無い。「馭者(フールマン)ヘンシエル」も亦「白痴」の一人である。「エマヌエル・クヴィント」はその最も純なる現

ばれである。そして今私が問題の中心とする「ゾアナの異教徒」(Der Ketzer von Soana, 1918)は其最も矛盾に充ちた暗い一面を描いてゐる。それは「カラマゾフ」の眷屬である。「カラマゾフ兄弟、一名歐羅巴の沒落」(Die Brüder Karamasoff od. der Untergang Europas, Neue Rundschau, Heft 3, 1920)といふ論文に於てヘルマン・ヘッセは「危險な、煽動的な、無責任な、そして同時に良心の鋭敏な、柔弱で、夢想的で、殘酷で、飽迄天眞爛漫な」露西亞人が今や將に歐羅巴人になりつゝあることを指摘してゐる。この「人間」には善と惡と神と惡魔とが並存してゐる。野獸と未來人との中間物である。獸性と原始性と强大な抑制し難き衝動とに充ち滿ちたこの種の人間は社會との調和を保つ上に無限の自制と克己と韜晦とを敢てせねばならぬ。既に歐羅巴の半は、少くとも東歐羅巴の半は混沌化せんとしてゐる。神聖な妄想に醉つて破滅の淵に沿うて彷徨してゐる。そして歌つてゐる。恰もドミトリ・カラマゾフのやうに陶醉してヒステリカルに歌つてゐる。この歌謠を聞いて市民(ブルジョア)は侮辱せられたやうに嘲笑する。聖者や豫言者は潸然として涙を流す。而して「沒落は轉て「母」への復歸である。亞細亞への、源泉への、ファウストに所謂「母達(ユッテル)」への復歸でなければならぬ。そは地上に於ける凡ての死の如く一の新らしき誕生に導くものである。如何となれば各の衝動はそれ自身よき

物である。唯時代に依て特に或衝動が忌避せられるのである。衝動の獸が眠覺めて咆哮するとき「カラマゾフ等」は生れる。或文明が疲れて動搖し始めるとき人間はヒステリックになり、不思議な欲望を抱き始めるそれは恰も春機發動期の青年や姙婦に於けるが如きものである。靈魂の中に一種名も無い衝動が生れる。これ、古い文明と道德とから見て惡しき物であるがその聲は自然で純眞である。之に新らしき方向と、新らしき名稱と、新らしき價値とを與へれば新文化、新秩序、新道德の根源となり得るのである。本能の獸は殺す可らず、これ自己の破滅を意味する。危險な過渡期の人間は新たに自己の魂を凝視し、新らしい獸の擡頭するを發見し、自己の內に超道德的の原始力(ウルクレフテ)の存在することを知る。かゝる運命を背負うて生れた者が卽「カラマゾフの眷屬」である。彼等はヒステリックで危險性を帶び、容易に犯罪人ともなり、又難行者ともなる。彼等は各々の信仰の絕望的懷疑性を信ずる外には何物をも信じない。

ヘッセの所謂「カラマゾフ」の屬性が「ゾアナの異敎徒」に著しく現はれてゐる。

二

瑞西のテッシン州に屬するアルプス地方に伊太利人種の住むゾアナといふ山村がある。登山者は遙かの高所に於て往々眼鏡を懸けた山羊飼ひに逢ふことがあらう。皮膚は日に燒けてゐるが一見教育のある人物だと思はせる。ドナテロの作つた洗禮者ヨハネの像に似通ふところがある。黑い髮が渦を捲いて褐色の兩肩に垂れ下がつた。山羊の皮で作つた衣服を纏つてゐる。登山者はこの男の異樣な風采を見て聲高く笑つた。案內者達は心の內でこの男を好いてゐるやうであつた。度々彼の住家まで登つて行つて打ち解けた話をした。旅客が彼等にこの異樣な聖者めいた男の事を訊ねると一樣に口を噤んで語らないが、餘程遠く離れてから、なほ好奇心を失はない旅客は、この男がある暗い過去を持つてゐて、里人から「ゾアナの異教徒」と綽名せられ一種迷信的な畏怖を交へた怪し氣な敬意を拂はれてゐることを知るであらう。著者がこのむくつけな隱者を訪ねた蒸し暑い六月の日に彼はこんな事を云つた。「愛神(エロス)はクロノスより年上で、また力强い事は御存知でせう。——私共の周圍(まはり)のこの熱を感じますか。エロスですよ——どの國民でも牡牛や、牡山羊や牡羊などを崇拜して、その神聖な血を犧牲に供へました。道理(もつとも)な話です。何故と云へば生殖力は最

高の力です、生殖力は創造力です、生殖と創造とは同一です――」彼は暗黑な生殖の神秘と、その歡喜と苦痛とを說いた。そして或日ゾアナの昔話として著者に長い物語りをした。それは恐ろしい醜い、憐れむべき奇怪を極めたものであつた。この話が一篇の骨子を成してゐる。實はそのヨハネに似た男の懺悔話なのであつた。

彼は若い熱心な敬虔な牧師としてゾアナに來た。多くの男女の信徒が彼の周圍に集り、彼の崇拜者となつた。或日山上から襤褸を纏つた陰鬱な牧人が彼の扉を叩いた。恐ろしい苦惱がその胸に巢喰ひ、その魂を嚙んでゐた。その妻はその血を分けた妹で、七人の子供は罪の塊りであつた。女は畜生道（ブールトシヤンデ）の事實を否認して、多くの登山者と馴染んだ結果儲けた子であると稱し、名も知らぬ父を持つ不幸を悲み、自分の淫行（いたづら）を悔い歎いたが、何人もそれを信じなかつた。彼女は汚穢を極めた、夜の樣に醜い女だつたからである。若い、眼鏡を懸けた牧師はこの不幸な咒はれた家族を憐んだ。彼等は村人から侮辱せられ、排斥せられ、野獸の如くに迫害せられた。七人の子供は教會の闕を跨ぐ事を許されなかつた。若い牧師は彼等の爲めに神に祈り、其汚れた魂を救はふと決心して、二里の山道を登つて牧人の小家を訪れた。一歩毎に山の偉大な、清新な、美觀が彼の自然に對する眼を開いた。其所には神學書の世界とは。

全く異つた自由な潑溂な力と光とに充ち滿ちた蠱惑的の天地が展開せられた。惡戯な牝山羊が馴々しく彼の肩に前脚を懸け、彼に食物を强請し、彼の聖書を喰べて仕舞つた。凡てが若い牧師に取て一の驚異であつた。

然し、最も大きい不思議が彼を待つてゐた。それはかの呪はれた畜生夫婦の間に生れた十五歳とも覺しき少女であつた。マドンナのやうな清淨無垢な幼々しい顏には心を迷はす愛と極めて微かな惱ましい苦味とが結び付いてゐた。白い頰に華かな紅味が浮び潤を帶びた唇は柘榴のやうな色に燃えた。この無邪氣な容貌の何處を取てみても、甘美と苦澁と憂鬱と快活とが融け合つてゐた。その眼差しには臆病な逡巡と優しい要求とが在つた。然し二つとも野獸的の激動では無く、無意識的にほのかに匂ひ出づるやうなものであつた。かく眼は花の謎と夢幻とを含むがごとく見えたが、全體の姿は寧ろ美しい熟れた果實にも似てゐた。明暗を交へた褐色の髮が重く顴顱と額の周圍に束ねられてゐた。一種內部から醱酵する雅純な睡魔とも云ふ可きものが、彼女の睫毛を壓し、その眼に潤んだ溢れ出るやうな情味を與へた。首の音樂が象牙の頸筋を流れて肩に移るとき、全く異つた曲調が奏でられる。其處から「女性(ワイブ)」が始まるのであつた。子供らしい首と不調和に見える程豐滿な妖艶

な「女性」である。素足と日に燒けた腓とは餘り重きに過ぎる程發育してゐた。彼女の天使のやうな首は地精の宿るかと思はれる軀幹の情慾的の神秘を、無意識的に、或は精々微かなる豫覺を以て所有してゐた。然し、恰も之が爲に若き牧師はこの首とこの全能なる體軀に救ひ難く命を賭けて牽き寄せられるのであつた。

若き牧師は泣いて祈り、懺悔し、自ら笞打つた。然し呪はれた少女の姿は彼の胸に喰ひ入つて須臾も離れなかつた。彼はまた牧人の家で見た滑稽な生殖の神の木像や、有名な彫刻家であつた亡き叔父の作つた裸體像などに就て奇怪な幻影を持つた。又かの少女が牡山羊の背に乘つて其角を握りながら、髮を振り亂し、蹄を露はして、助けを呼びつゝ狂奔するバッヒャンティンの樣な有樣を眼のあたり見た。彼の心は益々騷いだ。終に彼女が始めて彼の敎會を訪れようとして村人の迫害に逢ひ石を投げ付けられ、狩り立てられた美しい獸のやうに彼の腕に身を投げたとき、彼の熱い戀愛は更に深い同情憐愍の糧を得て燃え上がつた。それは二人の肉も魂も燒き盡すやうな烈しい情火であつた。靜かな谷間の小家が彼等の飽くことを知らない耽溺の場處となつた。牧師はゾアナ全體の人々が彼に石を投ずる夢をみた。戀人アガーテの兩親が先頭に立つて彼を追跡する夢をみた。彼は牧師として殆ど考ふ可らざる

墮落の淵に陷つた。それにも係らず、彼はまた密會の場處に足を運ぶのであつた。

山羊を飼ふ隱者めいた男はこの長物語を他人の身の上のやうに著者に話したのであるが、著者は歸り途に彼の妻と思はれる美しい女に出逢つた。それは比ひ無く美しい聲で歌ひながら、重き壺を頭に載せて靜かに登つて來た。彫像のやうに美しい豐滿な肉體を持つてゐた。優しい顏が褐色の髮に裏まれてゐた。その甘い嘲るやうな紅い唇は抵抗といふ事を許さなかつた。この頸筋と、肩と、膨れ上がつた胸に對しては如何なる防禦も如何なる武器も無力であるやうに見えた。これが物語の中の「罪の女」では無かつたか。一身を「人間」に、「男性」に任し切るために神に背向いた女では無かつたか。

三

この物語は、ツォイスよりも、凡ての神々よりも年長で、力强い「愛神(エロス)」の魔力を描いたもので、其主題に於て別に新意を見出す事が出來ず、また踏切番の肉慾的な妻に於て既に現はれてゐる「惡魔的(デモーニッシュ)」の力に就てはハウプトマン以外に於ても幾多の詩人が書き古してゐる。クライスト、ヘッベルは勿論、現代に於てはヴェーデキントなどが最も露

骨に之を描いてゐる。卽「地の精」の不思議な牽引力と破壞力とである。そして、罪に絡んだ肉慾を取扱つたものとしてはズーデルマンの「猫橋」などがこの作と比較せらる可きであり、田舍の自然と兩性の情熱との對此はケルレルの「村のロミオとジュリヤ」を想はせる。更にゲエテの詩篇 „Der Gott und die Bajadere“ 及びかの薄倖な少女ミニョンの姿を思ひ浮べさせる。

要するに肉慾描寫としては少しも新らしい處は無いけれども、肉慾を人間の原始性の根本に置き、生殖を宇宙意志と見て、骨肉間の戀愛をさへ超道德的現象として寧ろ無關心の態度で取扱ひ、生殖卽創造の觀念から、太陽崇拜、陽物崇拜の昔に還らうとするやうな傾向は注目に値する。昨春公けにせられた戲曲「誰も知らぬ」(インディポーディ) (Indipohdi) に於ても十四歲の美しき少女ビルラアと其兄である精悍な美丈夫オルマンとの間に熱烈な戀愛を成立させ、其父プロスペロといふ魔法師に依て之を承認せしめてゐる。ビルラアとは希臘神話に現はれるドイカリオンの從妹にして其の妻なる女性に因んで名づけられたのである。所謂「希臘に於けるノアの洪水」の後この二人のものが堅き石から新らしい人間を創造したのであつた。この戲曲は沙翁の「テムペスト」を想はせるものがあつて、魔法師プロスペロは最後に法服を脫ぎ山上に永遠の安

息を求め、わが子なる兄妹にして同時に夫婦たる可き男女を祝福してかく云ふ、――

「汝は生に飢え渇きたり。わが肉汝の口に在り、わが血汝の杯に在るときにのみそは醫されむ。生きよ、われは喜で汝に代りて我身を捧ぐ可し。――オルマンさらば！さらばよ、ピルラア。命あるものを生めよ。」

そしてこの戯曲及其姉妹篇とも云ふ可き「白き救世主」(Der weisse Heiland)に於ても原始宗教の神秘界が描かれてゐる。

一言にして云へば老年のハウプトマンは原始人の世界に探り入つて其神秘の鑰を握らうと努力してゐるやうに見える。「神よ、余を成就したる創造界の膝に置くこと勿れ。むしろ余を創造に與らしめよ。問斷無き汝の創造に與らしめよ。しかせずんば汝の樂園を享樂すること能はざればなり」。ファウスト的の苦悶と瞑想と浪漫的の狂熱が詩人の心を捉へたやうに見える。彼は果して何處までこの神秘界に分け入るであらうか。終に歸路を忘れるやうな事はあるまいか。そしてこの原始的、還元的傾向が所謂表現主義の重要なる特色の一を形づくつてゐる事を思ふと、如何に現代の歐羅巴人が其在來の文明に於て破産して、再び根元から新文化を築き上げようとしてゐるかゞ分る。古き神々死して新しき神未だ生れずといふ言葉が今日

程痛切な意義を有つて吾人の耳に響くことは無かつた。思想界、藝術界、皆新らしき神の出現を翹望してゐる。

最後に、ハウプトマン衰ふといふ一部の世評に對して、私は必ずしも其然らざることを思ふ者である。少くともこの小說に描かれたるアルプスの自然描寫の如きはケルレルの作品を偲ばせ、現代に於てはローゼッゲルの筆致に似たものがあり、其性格描寫、悠揚たる叙述の態度など依然として現代の巨匠たる名を辱しめないと考へる。

（十、六）